

青丘文庫 月報

No. 118
1997 年 5 月 8 日発行

発行人 〒 654 神戸市須磨区須磨寺町 4-3-1 メゾン・ド・青丘内 青丘文庫

韓 哲 曦 TEL 078-735-0220 FAX 078-735-0220

編集人 〒 657 神戸市灘区山田町 3-1-1 (財) 神戸学生青年センター内

飛田 雄一 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878

巻頭エッセー

出版活動の魅力と魔力 飛田 雄一



私の勤める神戸学生青年センターには、出版部がある。出版部といっても特別の職員がいるわけではない。でも問い合わせの電話があったときには、「では出版部のものにかかります」などとカッコをつけたりもしている。

第一冊目の本は、1980年7月に発行した梶村秀樹氏の夏期特別講座の記録『解放後の在日朝鮮人運動』だ。セミナーは、「生」の魅力があるが、参加者の数が限られている。しかし本にするとそれに××倍する人の目に触れることになる。最初の本がその当時、類書がなかったことから話題となり、版を重ねた。それが病みつきとなってしまったのである。

最近、八幡明彦氏の『〈未完〉年表・日本と朝鮮のキリスト教・100年』を出版したので、宣伝のコピーのためにセンター出版部の点数を数えてみた。29冊だった。薄いパンフレットも含めているがよくまあ出してきたものだと思う。魅力には、魔力がつきものだが、出版の魔力は「部数」ではないかと思う。発行部数と印刷単価の関係は、当たり前のことだが、多く出すほど安くなるのである。そこで売れることを夢見て「エーイ、××部」と出してしまうのである。

定価をなんとか下げたいと考える結果であるが、売れ残っても捨てるような本は出していないので、だんだんと在庫がふえてくる。阪神大震災のあと、ある会議でセンター出版部の倉庫のことを心配してくださった方に、「在庫がぎっしり詰っていて倒れる空間がなかった」と発言して変に受けたこともある。

今年、1月発行の鄭鴻永氏の『歌劇の街のもうひとつの歴史—宝塚と朝鮮人』は、ローカルな話題であり、倉庫のことも考えて800部を印刷したら3週間で売り切れてしまった。うれしい誤算であるがこんなことがあるとまたまた、見通しを誤りそうである。魔力には気をつけたいものだ。

在日朝鮮人運動史研究会関西部会第 187 回例会 (97 年 4 月 13 日)

延辺の朝鮮族と在日朝鮮人 金森 襄作

朝鮮人の渡日は土木中心の、いわゆる「出稼ぎ型」から、1920年後半期ゴム・ガラス等零細企業への就業も始まり、「定着型」も増大していった。それまでの留学生中心の祖国朝鮮の延長運動としての民族主義的運動が、1930年日共下全協の労働運動へと転換したのは、このような状況下であった。(2、3年で弾圧され、その後は空白期。)(植民地独立か、階級的解放の統一的止揚論理は樹立できなかった。)

1945年日帝敗戦後の朝聯運動は、帰国促進と祖国建設の担い手作り(子女の母国語教育)中心の民族主義的な運動であった。(それだけ出稼ぎ型労働者や強制連行者が多かったことを物語るが)ところが、日共の指導を受けつづけるという矛盾をも内包しつづけていった。1946年、帰国が一旦終了し、数十万名の残留・定着者が明らかになった後にも、運動の転換は図られず、論理的矛盾を内在したまま、民族教育擁護、北朝鮮支持、朝鮮戦争反対等、極左的政治闘争へ突入していくが、弾圧により壊滅状況に陥った。

朝鮮戦争後結成の朝連は、一転して北朝鮮の在外公民機関と位置づけられ、日本内政に干渉しない運動機関となって今日に至っている。(その意味では、民団も同様)そして在日朝鮮人の地位向上、権利保証等の現状から次第に遊離していき、今日では、「帰化」の増加、民族学校就学の激減、日本人との結婚激増等<同化>の中で、在日朝鮮人問題は基本的問題を解決しないまま、解消してしまう危機に直面しているといえる。いうなれば、朝鮮人側も日本人側も共に<如何にして、如何なる、多民族社会を形成していくか>という運動と理論の構築をおこないえないできたということである。即ち、まだ多民族の方がよりより豊かだという次の日本社会像を形成しえないできたのであった。そして新たな外国人の渡日、不法残留者の激増の中で、外国人との<共生>のみ強く叫ばれている。

今後の在日朝鮮人のあり様、多民族社会像の模索を、日帝下の朝鮮人の<渡満問題>や、延辺朝鮮族自治区形成過程との比較からと考えたが、今回は単にその概容だけで終わった故、レジメ作成は割愛し、次回から具体化を行いたい。

神戸学生青年センター出版部の新刊書

八幡明彦編著

<未完>年表 日本と朝鮮のキリスト教 100 年

本体価格 1600 円 (送料 310 円)

申し込みは、郵便振替<01160-6-1083 神戸学生青年センター>で、
1910 円 (送料とも) をご送金ください



朝鮮民族運動史研究会 第 160 回 (97 年 4 月 13 日)

吳慶錫の政治認識

金河元

第一節 開化派の先駆：本稿では、具体的な政治活動と直接または間接的な関連の中で捕まえることのできる政治認識や思想に限定して、初期開化派の政治認識をその考察の対象にする。吳慶錫は 1853 年から 1875 年の間通訳官として延べ 13 回にわたって清国の北京との間を往来しながら、その都度西欧文明に接することが出来、それら北京での経験をもとに、国際的な圧力が直接または間接的に朝鮮王朝を迫ってきていた 1860 年代以来、外交的な緊張度が極めて高調していた事件が起きる度ごとに、その政治現場で直接且つ積極的に参画していた。

第二節 丙寅洋擾期の対外認識：吳慶錫の対外認識に大きな影響を及ぼした清国思想界の当時の水準、吳慶錫の学脈関係、朝鮮思想界の動向及びその水準、それらをもとにした認識をもとに保っていた大院君と吳慶錫との親疎関係の変化過程などの条件を考慮したとき、丙寅洋擾時期の吳慶錫の対外認識は、まずフランスの侵略を持久的防御戦でもって退治しつつ彼らの開港通商の要求を拒否することであり、それが無理ならば朝鮮の商品を輸出するというものであった。

第三節 辛未洋擾期の対外認識：吳慶錫はなにかの「所以」という根拠をもって開国を主張していたが、それがすぐいわゆる開化思想へ発展していたものだとは言えない。思考と政治活動との間の乖離が新しい直接経験を経て始めて狭まっていった清国洋務派の経験は、朝鮮開化派の場合においても例外でなかったし、吳慶錫の場合も、清国の事情を目撃することによって変化していた思考は、丙寅洋擾の時期においてはまだ確信をもって政治行動を押し進めるほど成熟していなかった。それが丙寅洋擾の処理にその実務を担当していく過程でもっと深化していき、具体性を確保することになり、辛未洋擾に至っては結局自分の政治生命をかけて大院君と真っ正面から対立するという確固たる認識へと変わっていた。

第四節 朝日修好条規の交渉期の対外認識：吳慶錫は宮本と森山ら日本使節団の随行たちとの密談の中で、開港不可避性の国内外の観客的条件やこの江華島談判以前の時期における朝鮮朝廷の外交政策の実体、それから今度の江華島談判の状況と日本側が条約締結を強制する必要性等を強く主張していた。吳慶錫がアメリカと日本の修交要求を彼らの厚意と理解していることには、彼らの侵略性を見逃している点で問題がある。ただしそれは単なる個人的な感情というよりは、この密談を通して、日本視察の可能性や自国資源活用の利点など、朝鮮の開化への具体的な展望が確認されたことから来る安堵感や感謝の念が、こうした心情の吐露という形を取って表れたものだろう。また、吳慶錫のこのような文明への主観的憧憬は、米・日の「厚意」に対する過信や艦砲開港の要求といった形に現れる一方で、朝鮮の文明開化への具体的な展望を果敢に切り開いていこうとする心理的な原動力となっていることも見逃してはならない。

第160回 朝鮮民族運動史研究会

1997年5月11日(日) 午後3時30分

報告者 宋 連 玉 氏

テーマ 「従軍慰安婦」 は公娼が否かを巡る論議について

研究会のご案内



- 阪急六甲より徒歩2分
- JR六甲道より徒歩10分
- 新幹線新神戸よりタクシー15分

第187回 在日朝鮮人史研究関西部会

1997年4月13日(日) 午後1時30分

報告者 高木 伸夫 氏

テーマ 「多木製肥と朝鮮人労働者」

会場は、いずれも神戸学生青年センター(地図参照)

(阪急六甲下車、北東徒歩2分、TEL (078) 851-2760)

《今後「研究会」の予定》(研究会は、原則的に第2日曜日です。)

97年6月15日(日) 水野直樹(在日) 未定(民族)

7月13日(日) 塚崎昌之(在日) 未定(民族)

《『月報』巻頭エッセーの予定》(原稿〆切は、前月の25日です)

6月号(李景) 7月号(宋連玉) 9月号(金河元)

10月号(佐野道夫) 11月号(金基旺) 12月号(伊地知紀子)

《関連集会案内》

朝鮮史セミナー／シンポジウム「自由主義史観」を問う－日露戦争・植民地支配・「従軍慰安婦」－

6月14日(土) 13:30～17:00 / 神戸学生青年センター 参加費 1000円

講師／滝沢秀樹氏、宋連玉氏、井口和起氏

第8回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働 全国交流集会／7月26日(土)～27日(日)

松江市社会福祉センター／TEL 0852-22-5111 内線 5477 大谷浩章 078-851-2760 飛田

日韓関係史エスプレントシンポジウム／8月28日(金) 18:00～29日(土) 15:00

於／神戸学生青年センター／TEL 06-958-2503 (西尾勉)

《編集後記》

6月の研究会は、第3日曜日です。ご注意ください。6月15日には、新しい神戸市立図書館の青丘文庫で研究会が開けるの予定です。ご期待ください。

(編集長／飛田 E-mail MXI01010@niftyserve.or.jp)